
ニュータウンぽんぽこ

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニュータウンぼんぼこ

【Nコード】

N9433N

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

ある日都会に爆発が生じる。

カップルが逃げ惑う中、手を離さないように気をつける。

そこに中年が現れて、「こっちにこい」と言う。

車に乗せられたカップル。

男が目を覚ますと、中年は「彼女は始末した」という。

男は怒り狂う。中年は理由を話す。

「ウルトラヒステリック」というわけのわからない病気が原因なの
だと言っ。

爆弾がそこら中で弾けている危険地帯を、数多くの人々が逃げ惑っています。

ある若いカップルも逃げていました。油断の許されない状況。

「うぎゃあ」

普段聞かないような不思議な叫び声が、街のいたるところから響いてきます。

人が弾き飛ばされている。まるでポップコーンみたいに。

広い公園の広間で、人々が固まって震えていた。だが、そこでも爆発が突如。

「うぎゃあ」「うぎゃあ」

みんなはじけ飛んでいくその光景。カップルはその地獄絵図に脅えながらも、手を離さぬように気をつけながら前へと進んでいく。と言っても、行き場は無い。ただ逃げ惑っているだけのことだった。

なにせ、爆発は何時どこで起きるかまったく予想がつかないのだから。

突然であった。街はいつも通りに喧騒で、都会だった。

人々は朝になればそれぞれの思惑を胸に秘めたまま街へと繰り出し、それぞれの行動を、日常を過ごしていた。それなのに、その喧騒は突然、爆発音と「うぎゃあ」という叫び声によって姿形を変え、雰囲気が一転する。

それぞれの思惑で生きていた人々が、一つの出来事に翻弄されていくというその状況。

爆発の恐怖。死ぬことに対する恐れ。次の瞬間には足元から爆発が生じるかもしれないのだ。

カップルは、二人手を繋いだまま逃避行！

「も、もうだめ」

女の方の体力が無くなりかけてしまい、車の走らない車道で、両手を膝につき、その後にはうずくまってしまい動かなくなる。そしてすすり泣きをはじめ。 「グスツ」と。

「だめだ、止まったら危ないって」

男はそうやって言うが女は動こうとしない。

「もう、いい」

と言うのだった。

そんな会話がなされているすぐ近くで、また爆発音がけたたましく鳴り響く。「うぎゃあ」という幾重もの悲鳴と、血の臭い。車道も歩道も関係なく、ビルも公園も関係なく爆発。

「うっ」

爆発で弾けた破片が、直立していた男の右腕にぶつかった。ひどい音が鳴り響いた後に、男も女と同様うずくまる。右腕からは血が流れる。カップルは二人、車道の中央でうずくまったまま、もうだめな様子だった。死に行く人の一員となるような、生気の薄さ。

そこに車が一台。

「おまえら、そんなところで諦めていいのかよ、もっと熱くなれよこんなもんじゃないだろ、熱くなれよ必死になれよなにやってんだよもっとがんばれよ」

何だか知らないが熱い男が車に乗ったまま登場。カップルは二人ともキョトン顔。

「なにキョトンとしてんの早く後ろにのれよ馬鹿野郎。ここは危険だから早く逃げ出すんだよ、そして逃げ出して体勢を整えた後は反撃を開始するんだよ馬鹿野郎」

なんだか熱い男で、うざったい。そんな中年の突然の登場によって、カップルは嫌な気持ちにさせられた。信用ならない輩にしか見えない。髭面なのがより怪しい。

「大丈夫、大丈夫、俺これも昔は嘘を一度もつかない男として有名だったボーイなんだから」

喋り方がもはや怪しいではないか。だけれども、カップルは男の車に乗り込んだ。

二人とももはや足が疲れていたし、ほかに行き場も無かったのだ。

そして車に二人が乗り込んだ瞬間に、二人が先程まで座っていた場所が大爆発を起こした。「どっかーん」である。というわけでカップルは目を見張り、女の方が、

「予言者か何かの方ですか？」

と尋ねると、中年は卑屈な笑い方をしてから、

「元、予言者だ」

と格好付けていうのだった。そして車が発進する。爆発を見事なテクで全て回避しながら、爆発だらけの街をドリフト走行で駆け抜けていくのだった。

「はっ！」

男は目を覚ました。何時の間にか気を失っていたのだ。辺りを見回すと薄暗い。

記憶が曖昧で、自分がなぜこのような場所にいるのか男にはわからない。女のことがか気にかかった。すると、暗がりの中から中年が現れて、こう言った。

「目をさましたか。お前に教えておかなければならないのだが、何か聞きたいか？」

と言われたら気になるに決まっている。男は、

「先を言っして下さい」

と息を呑みながら喋る。すると中年は答える。

「女は、始末したよ」

「はあ？」

男は意味がわからずそのような言葉を口にしたが、中年は続ける。「あの女が爆破をおこしていた張本人だ。ウルトラヒステリックという病気を抱え込んでいた女でね、その病気は自覚症状が無い上に発病時期もわからず、しかも生まれた時から抱え込んでしまう先天性の不幸なる病気なのだが、女はそれを持っていた。ウルトラヒステリックの爆発が彼女の周辺を爆弾まみれにしてみせたということが、今回の事件だ」

男には意味がわからない。

「だから女を始末したっていうんですか、この中年野郎」

男は女を愛していた。そもそも女はウルトラヒステリックなんて病状の兆候を見せたことなど一度も無かったのだ。男からすれば女は世界でもっとも愛していた女性だった。それを中年に始末させられた。うさんくさい病気という理由で。

「お前を殺したる」

男は近くに置かれていたナイフを拾い上げた。だが、中年は落ち着いたものだ。

「落ち着け。そのナイフは俺が置いておいたものだ。貴様が俺に刃を向けたいというのなら、それは当たり前前の感情だ。だがな、彼女は帰ってこないんだよ、俺を殺してもね。とりあえず、落ち着くんだ。窓を開けてみる。彼女を始末したから、爆発はもう起きていない。街は平和そのものだよ」

男はしぶしぶ窓を開けた。すると、たしかに爆発事故はどこにも生じていなかった。

普段の街並。

男はナイフを床に落としてしまい、呆然とした顔つきになった後にうずくまった。

「彼女を愛していたのに！」

男は叫んだ。

そしてその瞬間であった。

「どっかーん」

「じ、これは…」

中年は驚きながら窓に身を乗り出す。都会に爆発が再び生じたのである。

中年はうずくまっている男に振り向き、驚いた眼を向ける。それからしばらくの後に、何かに気がついたような「はっ」とした表情になり、こう男に告げる。

「貴様もウルトラヒステリックを抱え込んでいたということか。だから彼女とも相性がよかったということだ。…哀れなものだな、私

が貴様を始末してやろう。爆発をこれ以上起こさせて犠牲者を増やすわけにもいかんから」

中年はそう言い切ると、右手をドリルに変えた後に、男の頭脳めがけてそれを突きこもうとした。だが、男は右手でそれをおさえこんだ。

「な、なにー」

「うふふふふふ」

発狂している男は最強だった。中年はドリルをぶっ壊された後に顔面にパンチを一発かまされ、その結果よたよたしてしまい、気絶した。

男は中年の顔面を足で踏みつけながら、窓の外を見渡してこう叫び上げる。

「彼女のいない世の中など何の価値もないぜ、こうなったら全てを爆発させて都会を廃墟に変えてやろうじゃないか、へへへ。もう何がどうなっても構わん」

そう言って男が目を見開くと、大きな爆発が都会の中心で生じる。

8

だが男の勢いも数時間で終了である。

街がすべて廃墟になってしまったので、爆発させるものが無くなってしまうたのである。

空には太陽。それだけ。あとは荒野。

中年が背後でひっそりと立ち上がり、静かにドリルを回転させる。

「最低男はここで死ぬ」

殺された人々の恨み全てが詰まったようなドリルの勢いが、男の背中に目一杯突き刺さった。

「うぎゃあ」

男はもがきながら背中を削られ、そのまま窓から落っこちていった。

こうして世界は荒野になった。

中年は窓から、かつては都会だったその廃墟を見渡し、絶望する。人がいなくなつたその土地は果ての無い虚無。動物だつて一匹もないのである。草木もなければ花も無い。太陽はあるがけたたましい黒煙のせいで、くぐもつて見える。

中年は嘆き悲しんだ。頭で絶望を抱え込んで花のにおいや人々の喧騒を恋焦がれた。

こうして彼のウルトラヒステリックが暴発して、巨大な爆発。それによつて、荒野の地表が全てはじけ飛んで何処かへとはじけていった。

荒野の下には何があつたかというと、花があつた。花がたくさん生えていた。

中年はそれも爆発させた。花が飛んでいく。綿毛がふわふわと。そうして黒煙が消えて、太陽がすがすがしく見えるようになった。その後にもう一度爆発させると、今度は間欠泉であり、温泉が出来上がった。その暖かさにつられたのか、遠くから観光客がたくさん訪れるようになり、猿も現れた。そして、人々がどんどん集まり始め、やがてそこは村と呼ばれるようになった。その後には発展していき、町が出来上がり、そして街が出来、やがてそこは都会と呼ばれるようになった。

中年は皆から親しみを込めて、長老と呼ばれるようになっていた。終わり。

(後書き)

わけわかんないのはいつものことですが、今回もそんな感じですよ。
それを売りにしたいのですが適当すぎますかね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9433n/>

ニュータウンぼんぼこ

2010年10月8日13時58分発行